新約聖書 ルカによる福音書 9 章 28 節―36 節（新共同訳）

[28] この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、および
ヤコブを連れて、祈るために山に登られた。[29] 祈っておられるうちに、イエス
の顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。[30] 見ると、二人の人がイエスと語
り合っていた。モーセとエリヤである。[31] 二人は栄光に包まれて現れ、イエス
がエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。[32] ペトロと
仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そ
ばに立っている二人の人が見えた。[33] その二人がイエスから離れようとしたと
き、ペトロがイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばら
しいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモー
セのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言ってい
るのか、分からなかったのである。[34] ペトロがこう言っていると、雲が現れて
彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。[35] する
と、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞
こえた。[36] その声がしたとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈
黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった。

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「白く輝き」

本日の福音書の冒頭には、イエスが、弟子のペトロとヨハネとその兄弟ヤコブの三人の弟子だけを連れて山に登ったと記されています。「この話をしてから八日ほどたったとき」の「八日」とは、ペトロが主イエスに「［あなたは］神からのメシアです」と告白した直後に、イエスが、ご自分が受けなければならない受難と死と復活の予告をした出来事から「八日ほどたったとき」ということです（ルカ 9:18-27）。

ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、この三人の弟子は、十二人の弟子の中でも中心的な存在です。マルコ福音書で十字架につけられる直前のイエスがゲッセマネで祈ったときも、この三人を伴っています（マルコ 14:33）。そのためこの三人は、イエスに近しい弟子たちを代表する者とみなされていたようです。

山の上で「祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた」とあります（ルカ 9:29）。服が真っ白に輝いたとは、イエスの神の栄光の姿を表すものです。ペトロの信仰告白の直後の、ご自身の受難予告において、イエスは多くの苦しみを受けたのちに殺されるご自分の過酷な運命、そしてその三日後に復活することを弟子たちに語りました（ルカ 9:18-27）。そして今度はここで、復活のその時を、あらかじめ弟子たちに見せておくかのように、目に見える形をもって、真っ白に輝く神の栄光の姿を表したのです。

「イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた」とは、この世を超越したイエス・キリストの栄光と権威を表しています（ルカ 9:29）。権威というのは、この世的な印象を受ける言葉かもしれません。しかし主イエス・キリストの権威は、この世を超越したところにある権威です。

「イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた」（ルカ 9:29）。このことは、人の子イエスが、人々からの拒絶と十字架上の死に向かう中、突如として、来るべき神の栄光と権威が垣間見えた時でした。

そのとき、旧約聖書に登場するモーセとエリヤが共に現れて、イエスは彼らと語り合っていた、と記されています（ルカ 9:31）。これは、日常の中ではまず見ることはない、空前絶後のものすごい光景だったことでしょう。まさにこれは、神が一時的な形で現れることを意味する「神の顕現（けんげん）」でした。

モーセは律法を代表する人物、エリヤは預言者を代表する人物です。また、ルカ福音書ではイエスとこの二人が話し合っていた内容が「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について」（ルカ 9:31）であったとしています。イエスの服が真っ白に輝き、イエスがモーセとエリヤと語り合っていたこの出来事は、イエスの受難・死、そして復活と結びついていることを示しています。

ペトロは、この輝かしい状態が長く続くことを願い、イエスとモーセとエリヤのために三つの仮小屋を建てることを提案します（ルカ 9:33）。ペトロの誤りは、十字架の受難における死と復活に向かう主イエスの道がまだ成就していない時点で、早くもその栄光をこの地上に確保しようとしたことでしょう。

ペトロは、なんとかこの素晴らしい出来事の記念碑として、小屋を残したいと思いました。これが後の日になって「あんなこと、本当に起こったんだろうか」とあやふやになってしまう前に、山の上に目に見えるしるしを残しておきたかったのではないでしょうか。

人間の心情として、大切なものをしっかりと目に見える形で残しておきたいというものがあると思います。しかし、目に見えるものはいつかは消えていきます。記念として仮小屋を建てたとしても、それはいつかは朽ちて無くなっていくでしょう。決して消えることのない確かなもの、「永遠」を見出していくために、私たちは、心の目をしっかりと開き、肉眼では見えないものを信じていくことが大切なのだと思います。

福音書には、重要な場面で、ピントのずれたことを考えている弟子たちの無理解がしばしば記されています。それは私たち人間の姿とも言えるのではないでしょうか。

その後、雲が現れて彼らを覆います。「彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた」とあるように、山上でイエスの姿が変わったこと、そしてそれに伴い雲に包まれたことは、彼らにとって恐ろしいことでした。

おそらくこの時、弟子たちは、普通の恐怖とは違う、意識の根源から来るような恐怖を感じたのではないでしょうか。

L.M.モンゴメリ著『青い城』という小説の中で、恐れについてこのように述べられている箇所があります。

「恐れは原罪である」

雲が彼らを覆い、その中から声がありました。「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」（ルカ 9:35）。そのときすでにモーセとエリヤの姿は見えず、ただイエスだけが弟子たちと一緒にいました。イエスも、いつもと同じ姿に戻っていたのでしょう。「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」という言葉は、モーセとエリヤにあらわされる律法と預言の時代から、主イエスに聞き従う新しい時代が始まったことを示しています。

もとの姿に戻ったイエスと共に、一同は山を下ります（ルカ 9:37）。山を下りるとは、山の上でこの世を超越した神秘体験をしたあと、再び地上の日々に戻ることが示唆されています。

山上でイエスの姿が真っ白に輝き変容（へんよう）したこの出来事は、イエスの受難、死のあとの復活の「先取り」「予告」でもありました。「弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった」とありますが、「当時」弟子たちが沈黙していたとしても、その後、イエスが復活した後、彼らがこの出来事を明らかにしたからこそ記録に残っています（ルカ 9:36）。

本日の福音書は、他の福音書の箇所とは異質であり、特殊です。それは論理的ではなく視覚的、超越的で、ある種、幻想的とも言えるのではないでしょうか。

あなたが苦難や苦しみの中にある時、あるいは喜びの中にいる時、山上で服が真っ白に輝いたこの時のイエスの姿を思い浮かべてみてください。「山上の変容（さんじょうのへんよう）」と呼ばれるこの箇所は、現代に生きる私たちにも、希望と救いと喜びをもたらし続けてくれているのです。

そして、聖書の世界に目を向けると同時に、自分自身の世界にもより意識を向けてみてください。そこには日々、ささやかなことから大きなことまで、神が一時的な形で現れることを意味する「神の顕現（けんげん）」が起きています。

そこには、万人に同時に働きかけるキリストではなく、あなたと向き合ってくれるキリストがいます。

山上でイエスが三人の弟子の前だけで、真っ白に輝く神の姿を見せたように、主イエス・キリストは、あなたのもとに個人的に来てくれるのです。

ペトロが提案したような目に見える記念碑を残さなくても、イエスの顔の様子が変わり、服が真っ白に輝いた山上でのその光景は、三人の弟子たちの心に消えることなく残り続けたでしょう。

私たちも、主イエス・キリストの山上での光景をしっかりと心に覚え、日々喜びにあふれて歩んでいきましょう。

お祈りをいたします。
天の父なる神様。あなたは、時に従って、あなたの栄光を私たちに見させてくださいます。私たちがあなたの栄光を見るときも、試みの中にあるときも、あなたの声に導かれて歩んで行くことができますように。救い主 イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 出エジプト記 34 章 29 節―35 節（新共同訳）

29 モーセがシナイ山を下ったとき、その手には二枚の掟の板があった。モーセ
は、山から下ったとき、自分が神と語っている間に、自分の顔の肌が光を放っ
ているのを知らなかった。30 アロンとイスラエルの人々がすべてモーセを見る
と、なんと、彼の顔の肌は光を放っていた。彼らは恐れて近づけなかったが、
31 モーセが呼びかけると、アロンと共同体の代表者は全員彼のもとに戻って来
たので、モーセは彼らに語った。32 その後、イスラエルの人々が皆、近づいて
来たので、彼はシナイ山で主が彼に語られたことをことごとく彼らに命じた。
33 モーセはそれを語り終わったとき、自分の顔に覆いを掛けた。34 モーセは、
主の御前に行って主と語るときはいつでも、出て来るまで覆いをはずしていた。
彼は出て来ると、命じられたことをイスラエルの人々に語った。35 イスラエル
の人々がモーセの顔を見ると、モーセの顔の肌は光を放っていた。モーセは、
再び御前に行って主と語るまで顔に覆いを掛けた。

新約聖書 コリントの信徒への手紙 二 3 章 12 節―4 章 2 節（新共同訳）

12 このような希望を抱いているので、わたしたちは確信に満ちあふれてふる
まっており、13 モーセが、消え去るべきものの最後をイスラエルの子らに見ら
れまいとして、自分の顔に覆いを掛けたようなことはしません。14 しかし、彼
らの考えは鈍くなってしまいました。今日に至るまで、古い契約が読まれる
際に、この覆いは除かれずに掛かったままなのです。それはキリストにおい
て取り除かれるものだからです。15 このため、今日に至るまでモーセの書が読
まれるときは、いつでも彼らの心には覆いが掛かっています。16 しかし、主の
方に向き直れば、覆いは取り去られます。17 ここでいう主とは、“霊”のことで
すが、主の霊のおられるところに自由があります。18 わたしたちは皆、顔の覆
いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、
主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。
4:1 こういうわけで、わたしたちは、憐れみを受けた者としてこの務めをゆ
だねられているのですから、落胆しません。2 かえって、卑劣な隠れた行いを
捨て、悪賢く歩まず、神の言葉を曲げず、真理を明らかにすることにより、
神の御前で自分自身をすべての人の良心にゆだねます。

教会讃美歌　172 番「つくりぬしを ほめたたえまつれ」、181 番「ここにいます」、260 番「主イェス・キリストよ」、328 番「主イェスにしたがう」